

座談会 子どもの育つ環境づくりに向けて

遊び・自然・まちづくり

大村 俊一 加藤 彰彦 村橋 克彦 森清 和

一——子供を取り巻く状況

加藤 まず最初に問題提起というところで、今の子供たちがどんな状況にいるかということをお話したいと思います。

僕は児童相談所におります。ここに来る子供たちはほとんど登校拒否だとか、家庭内暴力だとか、そういう問題を持った子供たちが多いのですが、それが出てくる背景に、今の子供たちが置かれている状況というのにかなり共通なものがあると思ってきました。児童相談所は問題のあ

る子だけじゃなくて、普通の子供たちを対象にしてやらなければいけないというのが本来のことだったというところもあって、いつか今の子供たちをターゲットに何か具体的な実態調査をしてみたいという思いがあったのです。

ちようど横浜市で、高齢化社会に向けた子供の環境調査をやるということで、ここ二年間にわたってやったのです。都心とか農村地帯とかの七つの中学校から二クラスずつ選びまして、思春期で変化する時期ということ、中学校の一年生、五五〇人

にアンケート調査をしたのです。なおかつ一年後に、興味のありそうな子供たち、いろいろ発言をした子供たちを五〇人ぐらい集めて、丸一日かけて話し合いをするということをやりました。

その中から見えてきたことなんですけれども、一つは、子供たちがみんなすごく疲れています。僕は直接現場に行って子供たちに会って話をしたのですが、言葉としては非常に明るい言葉がいっぱい出てくるのですけれども、全体としては疲れているという実感です。

- 一——子供を取り巻く状況
- 二——子供と遊び
- 三——子供と自然
- 四——先進国共通の問題
- 五——冒険遊び場とは
- 六——共同社会のルール作り
- 七——子供と自然とのつながりを作る
- 八——世田谷の実例
- 九——リーダーの質
- 一〇——子供、自然、まちづくり運動のネットワーク

アンケートの一番最初に「あなたは何歳まで生きたいですか」という質問をしたのです。びっくりしたのは五九歳未満というのが一割強いるんです。学校によっては二五パーセント、四分の一。これは一つはそんなに長生きしたくないというか、生きないと思ってるんです。

次に、大人になりたいと思ってるか、あるいはなりたくないと思ってるか、あるいはなりたくないと思ってるかという質問を続けていたのですが、大人になりたくないという子供たちが半分を超えているのです。これは横浜だけの現象かなあと



思ってNHKの調査なんかをみると、全国調査でも七割です。子供たちは大人になりたくないと考えているのです。割と早死にすることを自然に考えていたり、死ぬんじゃないかと思っていたり、死にたいと思っていたりする子がふえています。こういう傾向があるのです。

「ほっとする」のは寝る時「いやな時」は勉強・授業・起きる時

一日の中で、子供たちがどんな時間を過ごしているかということ、丁寧な時間割もとってみたのです。

「一日の中で一番ほっとする時間はどんな時間ですか」という質問をしたのです。これが一つだけはダントツに飛び抜けて、寝る時間なんです。

す。

それから同じ系列の質問で、「最もいやなときは」という質問をしたのです。これは三つにばらついて山ができていて、勉強というのが一つです。これと並んで授業です。つまり括弧して学校とか先生。それからもう一つが寝るの反対の起きるとき。子供たちが起きてから寝るまで大部分生活している時間は学校ですから、学校とか勉強というものが子供たちにとって非常に魅力のない時間になっているんだなあとということがわかります。

悪いものばかり続きますが、健康状態を聞きました。とにかく今、余り調子がよくないと答える子供たちが四人に一人、二五パーセント。同じようにかつたるいとか、イライラするとか、つまらないとか、そういう子供たちが非常に多い。これも全国調査と比較してどうだろうと思っ

る全国よりはいいぐらいの感じなんです。それが、それほど悪い。とにかくイライラしていて、どこかにエネルギーをぶつきたいとか、学校の中でメチャメチャ暴れたいという子供たちの回答が半分近くです。こういう状況が調査の中で出てきたのです。

逆に一日の中で「最も楽しいときは何ですか」という質問をし、これで僕は救われたのです。ダントツは友達といるときです。おしゃべりしているときというのが、それでも三割ですけれども多いのです。友達がいらない子供たちが、ほぼ同程度で、一人でテレビを見るといふことで、学校に行っているのは友達に会うためだというのが、言い方としてはつながってくるという感じがあるんです。

もう一つ、きょうのテーマに関係づけていうと、身近なところで欲しいものは何かというのでたくさん選択肢をつくって聞いたのです。そうすると三つ、パーセンテージが非常に高いものが出てきます。この三つが、今の答えと大体ダブってきます。

すが、もっといろいろな遊ぶ場所とかチャンスが欲しい、仲間が欲しい、これが一つです。それからスポーツのできる場所、それからくつろいだり憩える場所ということ、この中には公園や水や緑や散歩道、遊歩道というものが出てきた。自由に書かせると、中には大人が余り入らないで子供だけという空間とか、夜、自由に泊まらせてくれるところとか、そういう書き方が割と多いのです。

主だったところだけを挙げただけですけれども、今の子供たちが全体として非常に疲れていて、イライラしているけれども、友達と会うことが楽しくて、みんなで憩える場所だとか、友達が欲しいとか、ちょっと自然があつた方がいいとか、そういうようなものを求めているなどというのがあるわけです。

狭まった生活空間

大体これをまとめてみると、今の子供たちは、一つは生活空間が非常に限定されてきているということが

あると思うのです。極端な話は家と学校と塾、もっと突き詰めると家の個室と、学校の教室と、塾の教室、ここを行ったり来たりしているという、実態がある。

それから次は、具体的な体験の場がほとんどなくて、代理体験として、見たり聞いたりしているという状況に追い込まれていて、情報は非常にたくさんあるけれども、自分で体験をしていない。

そういう中から、人間離れというか、人間と会うのが余り好きじゃない、一人でいたいというのが、逆に表面的に出てきてしまっていて、機械との接触がむしろ多くなって、パソコンとか、ファミコンとか、あるいは電話とか、テレビとか、そういう関係の方にむしろのめり込んでしまうという状況になってきている。こういう背景の中から児童相談所なんかにも子供たちの相談がくる。その辺の問題をちゃんとしないと、小手先だけというか、表面的な対症療法をいくらやっても、どんなこの問題は出てくるばかりだとい

うのが、一つ考えていることです。

親の側も混迷

もう一つつけ加えて、親の側の問題ですが、これも横濱市の家族問題研究会の調査報告があります。三歳児を持つている親、それから小学校五年生、これも思春期に入りたての子供たちを持つている親と子供たちの問題を調査しているのです。

三歳児の方は、要するに子育てがよくわからない、子供のしつけがほとんどできないで子供が自立することができないという親が二割。それから子育てを楽しいと思わない、むしろ辛いという親が三割。そういうふうな状況になっている。

それから五年生の子供たちになると、一つは受験戦争の中に入り込んできて、一生懸命子供たちを受験勉強一色に向けていって、そのために子供が頭痛だの腹痛だのということに保健室に入り浸るとい感じになりかねないというのが、これもやはり二割ぐらい。それから逆に勉強からも落ちこぼれ、遊びとか、子供集

団からも落ちこぼれてしまうような、親が子育てに手をかけていない家庭というのも二割ぐらいというふうなことです。

この辺も、進学させなければいけないけれども、無理にさせると子供にだんだんストレスがたまってくるという状態になっていて、そこから落ち込むと、今度は非行や怠学に走るといふことで親もどうしていいかわからない。こういうことで家族にストレートに責任がくるといふ状況の中で、親たちも混迷している、こんな状況が調査としては明らかになっている気がします。

そこで、特に子供の成長環境として、何が大事かといふので、問題が二つある。子供にとって遊びといふか生活を取り戻すこと、そういう意味で遊びというのは子供にとって——労働も一つの遊びであるという考え方もあるという意味で——非常に重要であるといふことと、もうひとつは、自然が非常に重要ではないか。この辺が大分抜けているのではないかと思うのです。

大村さんの方にバトンタッチをしたいと思いますが、マルタ宣言の中注①では、子供にとっての遊びといふのは一番大事なものだといわれているわけですが、子供にとっての遊び、あるいは人間にとっての遊びといふことと、今の子供たちが置かれている状況みたいなことをお願いします。

二——子供と遊び

大村 加藤さんがおっしゃったような子供の置かれている状況が何か変だといふのは、随分前からいろんな形でいわれてはきているけれども、それにどういふ手を打ったらいのかといふのは、実はよくわかっていない。みんな一生懸命に工夫してこうしたらいいんじゃないか、ああしたらいんじゃないかといふいろんなことをやってきた。だけど、それが本当なのかかわからないうちに、どんどん深みにはまっていっている状況だろうと思うのです。

僕は割に単純に、一番大切なのは、子供が自分でおもしろく毎日楽

大村虔一さん



しく生きていかだかと思っ
ている。それは、大人にとつても同じ
で、何かやっぱりおもしろいとか楽
しいとかいうことが一つあって、夢
中になって追いかけてると途中の苦
労などは多少忘れていられたり、本
当は疲れていても疲れを感じない。
ところがそれがもともどんなにお
もしろいことでも、だれかにやらせ
られてることは、「これは飯を食う
ためだからしかたない」なんて思っ
てやっていることは、すぐ疲れるわ
けです。

子供は「させられる」ばかり
今の子供の置かれている状況は、
かなりの程度、やらされることばか
りになってしまっている。社会は、

やらされることと、やりたいことを
自分でやるのが適度にバランスし
て成り立っているはずだけれども、
それが子供の社会はさせられること
の方が圧倒的に多くなっている。つ
まり人間として自分のやりたいこと
をやることは人権の一つだと考えれ
ば、子供の遊ぶ権利というのはそこ
にあるだろうと思うのです。

大人にしても、別に何か無理強い
するつもりがなく、いい大人に育て
たかったり、次代を担う立派な担い
手を育てようと思ったり、いろいろ
抱負があったことに違いないけれど
も、それが断片的になされて、ある
いは子供の身になって考えられてい
なかつたために、子供の生活がほと
んど「させられる」だけという状況
になっている。

私がいつもする話で、これはある
幼稚園の園長先生から聞いたのです
が、子供が幼稚園で朝、遊んでいる
ときに先生が「こっちにいらっしや
い。みんなで砂遊びしましょう。」と
呼んだら、みんな集まったけど一人
だけ隅にうるちよろしてる子がい

る。先生が「〇〇ちゃんいらっしや
い」と呼んで「お砂遊びをしましょ」
といったら、子供は何かやりかけて
いたことをしどろ中してやって
来た。そして先生の方を向いて、
「お砂遊び終わったら本当に遊んで
いい？」と聞いた。(笑)

遊びは、やりたいことをやりたい
ペースでやるもの
要するに遊びというのは、これは

お砂遊びですとか、これは何とかで
すというのではなくて、やりたい
ことを、その人がやりたいペースで
やるということが本来の遊びだ。遊
びか労働かなんていう区別は活動自
体にはなくて、動物を飼育するのも
やらせられれば仕事になるけれど
も、自分で飼ってみたいと思っ
れば、遊びになるわけです。大人も
それで日曜でぐったりしたいのに
フェンスにペンキ塗れなんて奥さん
にいわれれば仕事です。けれども、
ヨットを持っている人が、ペンキを
夢中になって塗っているときには、
遊んでいるわけです。ですから同じ

行為でも、それが労働になったり、
遊びになったり、楽しみのもとにな
ったり、苦痛のもとになったり、い
ろいろ変わる。

仕事と遊びが判然と分かれてい
て、仕事で辛い思いをしてお金を得
て、遊びで消費するのではなくて、
やることの中に生産性もあって、本
人も生きがいを得られていたら、そ
れは恐らく最高の状況だろうと思
います。

子供のときは、僕は少なくともそ
ういう最高の状況にあったんだろう
と思う。手伝いさせられたりいやな
こともいっぱいあったけど、でも大
半はかなりいい状況にあった。親の
ところからさっと逃げていけば自分
の世界をつくれたわけです。そ
ういう状況がなくなってしまうたこ
とが一つあるんじゃないでしょう
か。

遊びモデルの欠落

遊びに入っていくとき、こまを回
すなんてことでも、うまく回してい
る人を見て、ああいうふうに自分も

なりたいと思う願望から始まるわけです。そして自分もやってみるんだ

けど、こまを取られたりして、非常に悔しくて何回もやっている間に、いつの間にか少しづつ腕がよくなっていく。現在は自分もやってみたい、あんなふうになりたいというモデルが社会の中から欠落していて、それが子供の遊び集団をつくらないう状況になっているらうと思うのです。

だれかおもしろいことをやっている人がいれば、どうしたってやってみたくなるわけです。ところがおもしろいことをやっているように見えなくなっている。

お母さんたちの集まりのときによくいうのですが、料理するとき、きょうも晩のおかず大変だと思ってくるか、それともルンルンして、きょうは何か新しいのにチャレンジしてみようと思ってしまうので、教育効果はすぐ違う。楽しそうにやっていると思ったら、料理をつくる楽しさに対して子供がまねてみようと思うし、ああいやだ、いやだと思っ

ていればだれもまねてみたいとは思わなくなる。

子供の世界の中に遊びの要素が極端に減ってきている。大人の暮らしの中で、みんな楽しげにやっていると霧囲気が消えているのが、非常に大きな要素だろう。遊びもそうだし、日常の家庭のいろいろなことがみんなそういふふうになっていると思うのです。

加藤 全部絡んでいますね。

大村 子供だけじゃなくて、みんな絡んでいるんじゃないでしょうか。

それで我々が世田谷の羽根木公園(注4)でやろうとしているのは、みんないきいき生きていることです。羽根木のお母さんたちは、羽根木の中で落葉を集めて薫製をつくったり、おみそをつくったりしています。自分の家の中ではなかなかできないことを、仲間集まって、だれかできるお母さんに学んで、何人かグループでそんなのやってみよう。ルンルンしてやってみよう。そうすると、自分の家にいるお母さんとはまた一味違って、非常に魅力的なお母さん

がそこにいるわけです。そういう要素がとっても大切なんじゃないか。

今、子供たちがやってみたくなくなるのは野球と音楽とか、要するに大人たちが夢中になっているテレビの中の娯楽の時間というか、ある時間を消費しようとする夢中になっている要素。そういうやつだけを子供は追いかけているわけです。だからある年齢になると音楽か何か、みんなワンパターンになる。それはある意味では家族のレジャーの持ち方がワンパターンだということの反映ではないでしょうか。

子供の遊びが子供の暮らしにとってどういう意味を持つかということ、私が考えていますのはそんなこととです。

加藤 今の話の最初に、自分のやりたいことをやるというのは遊びだけでなく、やらされているのは遊びではない。学校が嫌だという理由がよくわかりました。全部やらされているから。だから子供は学校がつまらないうということ、来たがらなくなっている。

もう一つはモデルというか、大人が非常に楽しんでやっているとかが大事で、今の子供の遊びが少

ないということは、逆に大人がワンパターンの遊びしかしていないということの反映だということ。いじめなんかも大人がしていたりして。子供がそっくりまねしてたりするかもしれない。

大村 やつぱり楽しいということに對する素直な価値評価が、我が国には余りないんじゃないか。トレーニングだとか非常に生ませる、もつと人生を楽しむっていうか。

三——子供と自然

加藤 自然の中に行くと、遊びと限らないかもしれないけれども、何か疲れがいやされるっていうか、ほっとしたりとかっていうことはありますよ。何か自然にやりたいことがやれちゃうというふうな。

村橋 私自身のことをいいますと、今の子供よりは自然との接触体験を持っていたはずですが、四〇歳代の

時点で考えますと、子供のころの経験がやっぱり少なかつたという感じがするんです。

ちょうど終戦の焼け跡で子供時代を生きてきたんですけれども、どういうわけか日本人のくそまじめというのか、それを引き継いでいたような気がします。

楽しいことを考えるよりも、この社会が何か変ではないかという話から、自分の勉強とか何かを……。だから高校もまじめに勉強して、そういうことをやりたい大学に入って、そこで思い切り勉強してやろうと思ってきたわけです。

それ自体は悪いことでもなさそうで、今、ともかくそういう研究をやっているわけですが、本当に思い切り遊んで今の自分があるという気がしないんです。

ところが、就職してから地域の中に入っていったら、いくつかの体験をしていく過程で今のところに立ってみると、そういう遊び体験というのが非常に重要だと。今の年代の大人がそいつを理解していなくて、大

村橋克彦さん



人に問題があるというのを非常に強く感じていた。

「まいおか水と緑の会」でやっていて、初めは子供の問題を考えてたわけではなかったのに、このごろ何かそれを考えなければいけないという気がしてきました。

「まいおか水と緑の会」

四年ほど前のことですが、横浜市戸塚区の舞岡地区に、自然を残した公園をつくらうという企画があると、いうことを、我々市民たちが知ったとき、自分たちが何らかの形で参加するなり、力を出すことになって、そういう公園ができれば非常にいいんじゃないかと考えたのが会を結成した動機です。

そこは舞岡川のちようど源流域にあたっていて、山合いというか、谷戸の中に、周りが小さなならかな丘に囲まれて、谷の一番奥に水が出ている。昔田んぼだったところや、

雑木林だったところの面影が若干残っている。しかし雑木林が荒れていて、田んぼが休耕田になって葎が生えている。それをもう一度、昭和二十年代ぐらいか、あるいは戦前ぐらいの姿に取り戻したいなあと、直観的にメンバーが思ったというところが出発です。

私たちは、農業とマッチした自然とか、あるいは農業と一語にあった農文化、そういうものをもう一度受けついで、新しい形にできればいい。こんな風に考えているのです。

大人が楽しんでいる

だから、子供たちの前に自分たちが大人がまず楽しみたいということから出発しているという事です。

ついでに、「横浜いいじゃん会」^{注5)}の例に触れておきましょう。あれは冒険遊び場からヒントを得て、コミ

ュニティパークというのをつくらうと考えていった。その考え方は、子供に何とか遊び場の空間を考えると、今、実験をしつつあるわけなんです。

それをやっていったところが、子供だけでは本当の楽しい遊びができないと、彼らはどうも気づいたらしい。それで大人も楽しむということ、地域にコミュニティパークをつくらうと考えている。ですから経緯は逆だけれども、私たちと同じところに、今、来ているのではないかという気がしているのです。

努力 生活スタイルを変えようとする

それともう一つは、私たちの会の主要メンバーで共通に認識していることは、生活のスタイルを何とか変えていこうと考えているということ。特に自然と接触するとか、生活の中に自然を入れるというのを、何らかの形で試みながら実践してみよう。食べもの話から、今のプラスチックの時代から、情報化社会か

ら、大きくいえば消費社会といいますが、その中で自分たちの生活の実態を考えて、一步一步だけれども変えていきたいという願望が、公園、谷戸という都市の中の身近な自然のところに場を求めて入ってきたという気がするのです。

それでいろいろな自分たちのやりたい実験をやってみた。例えばまず自分たちで、昭和二十年代か戦前ぐらいの、機械を使わない田んぼづくりをやってみた。子供も日曜日に来て、葦の根っこを五〇センチ掘つくり返す、そういう体験をしていく。それは大変なことだということがわかってくる。

「舞岡」へ来る子供たち
米づくりをする中で、子供にかかわるグループが二つ出てきたのです。一つは、田んぼができて、田植えをするときや収穫をするときだけ、集団的に大人の人が呼びかけてくるといふグループが出てきた。その中からもうひとつ、常時田んぼにきて米を作っていくという子供のグ

「舞岡」田植えの風景



ループが出てきた。それが上大岡のグループです。その上大岡の子供たちは、好きなきに草とりをして、飽きれば山に行く。遊びに来ているわけです。

この二つのグループは、舞岡に来ても、行動のタイプが異なっている。イベントのときに、上大岡の子供たちは田植えをやる。彼らは帰らない。指導者の若者たちが若干の手助けをするわけですが、日が暮れるまで山で遊んで、自然遊びをして帰

って行く。この自然遊びを年じゅうやっている中で、そのやり方を自分たちで工夫していった。例えば大きなロープをつくって大ターザンをやるとか、縄ばしごをつくるとか、非常に危険なことを自分たちでやってみる。子供たちのそういう試みを汲み上げながら、大人がうまく助言する、大人もそれで育っていくのでしようけれども、そういう形で、今度イベントのときには、たまに来る子供たちをその場に誘って、セットをつくって指導してあげるといふふう

に成長した。
他方で、イベントのときだけ来る子供たちは、田植えや餅つきや稲刈りをしたらさっと帰ってしまう。なぜかというところ、お母さん方が「はい、帰ろう」といって帰らせちゃうわけです。もちろんたまに小学校の先生が来て「遊ぼう」といえば、引っぱられて子供も自由に遊んでしまうわけですけども、そういう人がいなければ帰ってしまう。つまり若者の指導者のいる上大岡と、それからたまに来るお母さんたち、お父さん

ちの子供たちに対する態度が違ってしまう気がしているわけです。
加藤 非常におもしろかった。横浜でも自然は減っているわけでしょう。そういう中で、今みたいに恵まれたところというのは数は少ないと思うんだけど、都市の中の自然の中で、最初に水がだめになっ

ていくというか、それで川がどんどんなくなっていく。その次に土がコシクリートにかわっていく、原っぱや雑木林がなくなると、昆虫がいなくなってくるという形が変わってきているのがあって、そういう意味でどんどん自然がなくなっているという状況の中で、森さんは、都市の中に自然をというか、そういうこといろいろやっていらつしやるわけですから。
森 僕自身も、遊びとか子供は、最近は何分関心があるのでですけども、もとは別の形から入ってきたのです。市民運動や市民活動や自然保護運動とか見ていると、子供のためとか、先人の遺産を後代に残すとかいう義務感とか悲壮感でやっている

というのは、余りなじまないということもありますし、うまくいかないのじゃないか。何のためにやるかという、自分たちが遊ぶために、楽しむためにやるというのが本当ではないか。都市なりまちというのは遊ぶところであればいけないだろう。そういうことから遊び問題に関心を持ってきた。

子供の自然観にシヨック

子供については、幾つかシヨッキンクなことがあったりして、一つは川の問題をやつていまして、川をどうきれいにしようかという話を地域なり地元を話をして行つても、大人とか、前々から住んでいる人たちは、「今、汚くなった、何とかきれいにしたい」というと、「ではどうしようか」という話になり、すぐ話が通じるのです。

ところが、子供ですと、最近は大學生ぐらゐまでそうなつてきていますけれども、「何で都市の中の川をきれいにしなければいけないの」とか、あるいは「それを何で残さなけ

ればいけないの」という答えが返ってくるのです。それはそこで遊んだ経験がないから、川が遊び場というふうに思っていない。自然もそうですけれども、遊んだことがないから、そこを何とかしたいという意欲がわいてきていないし、エネルギーもない。「別段今のままでいいじゃない」、あるいは「ふたしてもいいじゃない」という。むしろふたして公園にした方がいいんじゃないかという、そういうのが返ってくる、そういう怖さがある。

あと、いろいろ各地で相談受けて調査なんかに行つているのですけれども、川が汚れてきた原因をいろいろ調べていると、ちようど一〇年ぐらゐ前になりますか、各学校でプールをつくりだして、子供を川で遊ばせなくなったという、それが一番大きな原因です。それはプールができただけではなくて、普通の川ですと、夏になると若者が川に出て、石を積んで、校区ごとのプール、町内会ごとの自然のプールをつくる、お年寄りが順番で見張りでもないけれ

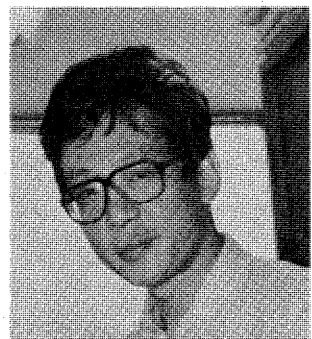
どもじつと見ている、そういう役割分担が面倒くさくなったというようなこともあるのでしようけれども。それから田舎ですと、川で泳ぐのはダサイという雰囲気もあつたりして、プールが文明的で近代的だということもあつて、全部子供を川に入れなくなつてきた。

子供が遊ぶと川はきれいになる

そうすると、子供が川で遊んだときには、自分たちの川だという意識があつて、みんな排水とか、捨て方に気をつけてたわけです。浄化槽も管理するし、いろいろなもの捨てないきれいだつた。それが子供がいなくなつてくると、あとは使ひ道がないということもあつて、それから一気に汚れだしてきています。

愛知県のA町では、下水道に代る浄化対策がいろいろあるのですが、一番最初にやったのは、子供を川にもう一度戻したのです。ソフトな浄化対策というか、子供を川に入れるのが一番いいんじゃないか。そういうことから、少し子供問題を考えて

森清和さん



みなければいけないと思つています。

今、加藤さんの方から横浜もだんだん自然がなくなつたといわれたのですが、自然は確かに少なくなつてきているけれども、まだまだ横浜はたくさん自然がある。大都市の中では比較的恵まれているといえますか、特に開発できない一、〇〇〇メートルクラスの山を抱えている大都市は別として、こういう一〇〇メートルから一五〇メートルぐらいの開発可能地のある都市の中では比較的にある方です。

その自然環境とか生物環境の調査をやつても、結構魚もいるし水遊びもできる。昔の人はそういうところでも泳いでいるわけですが、そう

いうところでも子供がいらないので、夏場に行っても、自然で遊んでいないというのが一番ひっかかってくる。

^{注⑦}グループ・大きな木の勉強会でも、先生方や幼稚園の保母さんに聞いた話ですけれども、小学生くらいでもチョウチョを怖がる子供が出てきているのです。ゴキブリとかへびと同じになっている。そういう危機的な状況がある。そんなところから子供と自然の問題を考え始めたのです。

四——先進国共通の問題

加藤 この横浜の状況は、世界的な状況になっているのじゃないかという気がしますが。

大村 子供の遊びというのをだれがいつごろどういうふうに気にし出したかは、よくわからないけれども、一つは教育を一生懸命考え出した、そういう時期でしょうね。かなり子供の教育問題について社会が目を向けていった時期にフレールベルなど

が、子供の遊びとか遊具に注目し出した。

イギリスではボーイスカウトをやり出したころ、大体一〇〇年ぐらい前だけでも、それはある意味での学校教育、フォーマルな形でのエデュケーションが整いかけてきていて、その中で忘れられている世界を大切にしようという考えが出てきてたと思います。

その後で、冒険遊び場というのは、第二次世界大戦の終わる直前ぐらいにデンマークで始まるのですが、それもある意味では経済的に恵まれた国で、文化が豊かになってきていて、文化的にも高いレベル、どちらかという先進国から大きな問題が出てきた。

日本のいろいろな子供の文化運動は、恵まれない子供に何とかもっと高度な文化を与えよう、つまり欠乏側からきているのです。それに対してどちらかという豊かな国の問題として出てきたのじゃないか。そういう意味で、イギリスなど、早くから豊かになった国で起きてい

る状況は、例えば女性の社会進出とか、それに関係して、ハイエデュケーションになっていく状況、高学歴などがからまっています、それが出生率の低下につながり、結局、高齢化社会になっていくわけです。昔は年齢別人口構成を見ると、年齢別のものだとピラミッド型をしていたものが、だんだん変わってきた。僕らが終戦直後に習った社会科だと、スウェーデンでは釣り鐘型、日本は富士山型の人口構成だったわけです。ところが今や、日本は昔のスウェーデンみたいな状況よりもっとひどくなっています。

子供が少なくなって過度な期待をよせる

そのように、自分たちの次の世代が少なくなっているという状況、そしてその少なくなっている子供たちを、社会が余り大切に育てようとするのですから、教育に過度な期待が寄せられて、結局自分の好きなことをやる暇もないような状況に陥っている。特に日本は中国文化の影響だ

と思います。科挙の制度なんかからくる、試験によって登用されていく仕掛けが非常に強いものだから、それがヨーロッパに輪をかけて強くなったのだらうと思うのです。そういう文明国から子供の遊びを失わせてきた状況が非常に強くあるだらうと思うわけです。

IPAの設立

^{注⑧}世界的には、早い時期、一番最初に参加したのは、北側のヨーロッパの人たちだけです。その後どんどん広がって、いろいろな国が問題意識を持ちだした。豊かになってくることによって、我々が失った子供を育てる環境といえますか、そういうようなことについて目を向けなければいけなくなりました。

また、何とか自分たちの次の世代をしっかりしたものに育てなければいけないという意識というのが、かなり早い時期に北ヨーロッパ辺りから起きていて、それは種の保存に対する非常に基本的な考え方だったら

うと思います。

住宅の仕掛け

特にスウェーデンなどの動きを見ていると、住宅のことも随分考えられてきている。彼らは三歳ぐらいまでの間に一人で友達を見つけ、友達と遊んでいく活動が、その後の人生何十年間に非常に重要だと考えている。三歳未満の子供たちが自分の戸口から外をながめて友達を見つけたことができる。見つけた友達がいると、親が心配することなく友達のところに行ったり、友達を呼んできたることができる。あるいは途中でひっかかって遊ぶことができる。その体験があるかないかが、その人の社会性とか、将来遊ぶとかいうことに非常に大きな問題になる。ギャングエイジになってからだけ何かを対象にしてやってもだめだというわけです。

それで彼らは自然のいっぱいあって広いところで、間口をセーブした、間口の狭い町屋のような住宅をつくる。出生率が減っているか

ら、子供のいる家族の数が限られているわけです。その限られている子供のいる家族の人たちが一カ所に集まって住んだときに、子供たち同士が目がいきとどくというので、わざとぎゅうぎゅう詰めまして、重ねたのではだめだというわけです。町屋のような長屋形式に一戸一戸狭い住宅を考え、そんなの一生懸命つくっている。

我が国では、子供は黙っていても育つと思っているから気にしてないけれども、子供が少なくなつて、放置していた子供が思ったように育たないということを経験している人たちは、非常に悲痛な気持ちだろうと思います。それは我が国も明日のどういふか、今なりかけているという状況だろうと思います。

身の周りに必要な雑多な要素さらに、彼らは例えば都市計画を非難し、これは住宅地域とか、商業地域とか、工業地域とかみんな分け過ぎたのではないか。子供たちが自由に遊んでいるというのは、身の周

りからいろいろ刺激を受けていたのだといっている。

遊びを発達させるためには刺激が大切で、それは自然とか身の周りの社会、つまり身の周りのお母さんとお父さんと幼稚園の先生と学校の先生とかいっただけではない、いろいろな人がいて、そういう人たちの生活が刺激になって、それがいろいろ子供の遊びに転化していく。だから遊びというのは本来は暮らしと非常に密接な関係があつて、そういう中からデベロップしていくわけです。そのところ、今の社会をもう少し何とかしなければいけないのじゃないかというような意識が強まっています。

五 冒険遊び場とは

大村 冒険遊び場というのはその中の一形態として、大都市の中ではほとんど子供には許容できなくなつた、昔ならば裏庭なんかで適度にやっていたけれども、大都会ではできなくなつたようなことを、何とか人

為的に工夫してつくってみようという試み、一種の努力です。

私たちがはじめたのは、最初は何かもない、暗渠になった川の上ですから幅一〇メートル足らずのところですが、まず、好きなことをここでやっています。夏休みの間だけですけど、好きなことやれる遊び場にしたかったです。用地を借りたりするのに、行政とすつたもんだいろいろやつたのですが。

そして子供たちが何かやり出すと、いろいろ問題が発生するわけです。近所からの苦情が出たり、遊びに連れてきているお母さんたちからの苦情が出たり、それが非常に数が多い。僕らが子供のときは別にそれぐらいのことをやっても何とも思わなかったことが、衛生の問題だとか、あらゆるところで問題になっていくわけです。

子供が遊ぶのは大したことだそうすると、子供が遊ぶというのは大したことないじゃないか、場所



ただで遊ばないわけです。ところがそれを日常的に身につけるほどのトレーニングの場所がない。別にどこでもいいのです、場所がなくても地域社会でやればやっていいのに、なかなかそれは大変です。

があれば黙っていても、うまく遊ぶのじゃないかと思っていたけれど、現実はそのようになってかなり規制されている。僕ら知らないでいる間に、いろいろしてはいけないことを、公園課だけが張り紙しているだけではなくて、親も隣近所の人も、うるさいとかいうことに始まって、随分子供たちに糸をかけて、やってみたいと思うことを抑えている状況にあるのだということがわかったわけです。

の中で、一生懸命になって、「ここは開放区なんだぞ」といって確保しまして、外から入ってくる余計な力を排除する。遊び場で子供たちが思う存分遊ぶには、抱え込んでいっているわけです、そこを維持しようとするには、そしてけがをすればどうだとか、いろいろなことをいってくるのに対して、具体的な手段を講じていくというようにやる。

昔は至るところが遊び場。昔は子供の遊び場は特別のものでなくて、家の庭とか路地だとか、生活空間のいろいろなところが、大人の暮らしのためだとか、産業のためだとかの専用ではなくて、みんなのためのものだったから、当然そこは子供が遊んでもよかった。時々盆裁壊して怒られたりするけれども、共有の場であつたわけです。共有の場がなかなか共有できなくなつてきて、それは都市の過密化だとか、管理主義的な社会風潮だとかいろいろ理由があると思いますが、そういう社会全体の変化の中で、何とかして場も守らなければいけなくなつたということですね。

だと、いいいます。つまり居住者はどんどん移り変わってくる。移り変わってくるときに、ここは子供の権利がある場所だといふのはつきり示しておかなければ、みんな力の強いやつに取られてしまう。彼らは一生のうちに五回とか七回ぐらい転居するのが普通な暮らしをしているわけです。そういう中では、基本的に子供の場所だといふ場所をいっばいつくるといふことが大切であつて、それがなければ苦情があつたときにみんなつぶされてしまう。ですから何としても子供の場所だといふのをいろいろな形でつくれというのがアメリカ人たちの議論です。

ヨーロッパの人と議論していて非常に違うと思ひますのは、私たちは基本姿勢は、遊び場なんていうのはなくて、至るところ自分たちの周りが遊び場として使える方がいいと考えます。これはある種の定住社会といひますか、人間関係が成り立っている社会での発想だと思ひます。しかし特にアメリカ人は絶対無理

僕らは理想郷を子供のとき遊んだ自分たちの状況を前提にしている。社会が比較的そういうことに対しては、ヒステリックとはいひものの、日本はまだ穏やかなんでしょうね。だから至るところが遊び場であつていいじゃないか。いつまでそういう状況を守れるかといひるのは、大人の側の意識なのかかわりで、今はか

なり怪しくはなっています。

加藤 公園とか児童遊園とか、場所ができたときというのは、もしかすると子供たちが自由に使えるような場所がなくなってきたということ、つくられた経過もあるのじゃないか。自然が少なくなってくると植木屋がはやると同じような経過があるのでないか。

大村 ヨーロッパなんかでは一戸建ての家は前提としては、都市の中にはないわけですから、どうしてもみんなの庭が「パブリック」という発想が出てくる。ところが我が方は最初そうではないから、自分の家にもともとおもてを前提にしてつくっていくから、みんなのものではなくて、お役所のものみたいな感じになってしまいうわけです。みんなの使う使い方という形がうまくわからない。

六 共同社会のルール作り

大村 それから自然でも遊びのことでも同じだと思いますけれども、自

由に何かができるというときの根本は、社会の中に、そこが自由にやられてもせいぜいこの程度という、非常に大きっぱなルールがあることではないか。だから原っぱで何かをやるといっても、「まさかこんなことは起こるまい」というのがあって、バッタをつかまえるとか、草野球するとかおおよそやるのが決まっている。だから原っぱは原っぱとして維持しても、社会はそんなに神経とがらせないで、好きなことを認めてきているということだと思っております。今の問題は、社会のルールがなくなっているということだと思っております。

自然も全く同じだと思うのです。自然を維持していくには、余り強くいじっては壊れるとかいうような、市民側にある程度の自然とのかかわりのルールがあって、特に都市の自然というのは、どう考えても自然の量に対して人の量が大きいわけですから、みんなが満喫しようと思えばあつという間に自然というのはなくなってしまいます。それで一生懸命

だれか管理者が抑えて、花を押るなとか、何々するなという規則をつかって、かろうじて維持している。

ところがそれは管理者側がいうことによつて「させられ」てしまうものだからおもしろくない。自分たちで決めていければ一番おもしろいわけです。そのルールを、管理者が勝手に決めたことではなくて、自分たちでやれる程度に、血の通ったようなルールにどうやって変えることができるかということが、地域社会の中で自由なことができるかどうかの大きな要素だろうと思っております。

子供の施設のインフラの整備を

編集部 地域社会のルール作りも必要でしょうが、横浜の場合には、非常に転居が多い都市ですから、ある程度のをきちんとつくってほしい。都市の中のインフラとして、児童公園もあるし児童館もあるし図書館もある、そういうものがたくさんまちの中にあることによつて、それぞれの人がそこに行つて出会つたりとか、越してきて間もない人もそこ

に行つてみれば何かに出会うとか、そういうものが欲しい、行政は最低そのぐらいのインフラを整備すべきだという意見もあります。

大村 僕はこんなふうに考えている。やっぱり今の状況の中では、定住者が住んでいるような都市ではないので、余り幻影を持たないで、移動してくる人たちを受け入れていくまちとしてのインフラをつくることはやらなければいかん。つくつていったインフラの運用に関しては、我々が持っていた定住している人たちによつて支えてきた非常に多目的な空間のおもしろさみたいなものを残す仕掛けを、あつちこつちで仕掛けていくべきだろう。

だからハードづくりとしては、幻影を抱かずに、しかしソフトの側で人間関係を回復する社会的な運動を起こしていくべきだろう。そういう社会的な運動を起こせば、ハードなもののはつくらなくていいかという、現実はそのなりに甘くはないわけです。

加藤 舞岡がそういう意味ではテス

トケースというか……。

村橋 先ほど大村先生がいわれた公園でもどこでも規則と管理者が必要となる。そして、川の縁には防護柵をしなければいけない。今の状況であれば、柵をしなければおぼれ死んだ場合は、住民側が行政を訴えるということになる。日本は近代社会をつくっていくために欧米の法制度をまねてつくってきた。市民の権利やシビルミニマムなりナショナルミニマムなりを保障するという点で大きなメリットがあるけれども、もう一つの地域の共同性というものがきちつとできていなかった。本当に自分たちでつくっていくという、そこが薄かったというか。社会運動という大げさですけれども、市民の意識が変わり、さらに法制度も含めて変えていかなければならないということでしょう。公園づくりでもたとえば「かに山」^{注(9)}の例のように、行政も相当時間をかけて住民の参加を得るプロセスを踏むことが大切だ。

加藤 みんなの庭みたいなもの、そうするとそこに一定のルールがあつ

て、それをみんなで作って来たという、それがあつて守られて来た、自主管理できたということだと思ふのです。そういうふうにつくれるかどうかというのが試されているという事です。

七 子供と自然とのつながり を作る

加藤 もう一つ、森さんの話の中で、横浜はどんどん緑が少なくなつたんじゃないかといったときに、まだまだ恵まれているという話は、逆にいうと重要な指摘だと思つていて、どういふふうにいるの自然を守つて、なおかつ子供たちのつながりをつくっていくかという、そこに焦点を当てて横浜を見た方が、だめだ、だめだというのではなくて、いいかなという気がしたのですが。

森 確かにたくさん自然がある。といつても人口からいけば絶対量は少ないんだけど、それを全部昔のように使いこなせばどうなるかといつたら、一変に裸になつてしまふ、

荒らされてしまふ。開放されているところだと、公園なんかの残っている雑木林ですと、踏みかためられていつてたちまち一、二年のうちにクワガタとか何もかもいなくなる。そのかわり他方では、公園になっていない、パブリックになっていない自然というのは荒れ放題になっていて、だれも入つて行つてない。そういう自然がたくさん残されている。

もある。ともかくいろいろな要素が、時間、空間、あるいは物が、複雑に絡みあつている、非常に総合的なもので、だからこそそこで遊ぶというのは非常におもしろい。

自然遊びのおもしろさ

その総合的なものを使いこなすためには、ルールというよりも、その仕組みなり、そのおもしろさをわかつてもらうことが、今、必要なじゃないか。何となく単純明解で、これはおもしろいよというものは乗ってくるけれども、本当のおもしろさ、そういうところで自然の遊びというのは、自由で自律的で、ルール化されていない遊びができるという、自分の能力とか集団であらうと個人であらうと、能力に合わせて、あるいはそのときの気分とか、きょう何やりたいという気分に合わせて、自律的に行動できる対象を相手にできる空間としての魅力を、一番持っているところじゃないか。そのおもしろさもう一つわかつてもらえない。遊び場としては、遊び場を

つくるといふよりも、本当の自然遊びのおもしろさが、今の横浜なんかを見ていると、よくわかってもらえてないのじゃないかという方が気になる。

さらに、自然の一番の魅力というのは、遊びと同じですが、子供の未来予知能力とか、いろいろな因果関係が見えるとかいわれているけれども、ともかく自分のアクションが自然を対象にやれば行為が見えるわけです。原因と結果が、プロセスが見える。今の世の中、全部ブラックボックスの中でできている。加工食品なんかもそうです。それが自然の遊びを通して、仕組みが見えるというのが、一番大きな意義ではないかという感じは持っているのです。

自然と年中行事

加藤 子供と自然というのは、大人の生活を絡めて考えると、日本は全体としては自然が多くあって、その中で生活そのものが自然を大事にしなから、リズムをつくってやっている。それは行事みたいなものにつな

がっていたと思うのです。夏には何が、冬はどうとか、自然と合わせていろいろな行事があって、その軸が子供たちだったという感じがするのです。

なぜ子供が中心に置かれてきたか、というのはいろいろ見方があるかもしれないけれども、僕の単純な見方というと、人間の中で一番自然性を持っている存在として見られていて、自然とオーバラップしてるところがあるということ、子供を軸にしたのではないかと思うのですが、それがコミュニティパークをつくらうだとか、舞岡の動きとかいうことの中で、復活するとかいうのか、新しい形の行事を含み込んだ年中行事というものが生まれてくる。そして大人と子供がそれを一緒に取り込んでくるというところから行われてきているのじゃないかなという気がするので。そんなのはどうですか、舞岡なんかでは。

火や水や土をとりこんだ
季節の行事

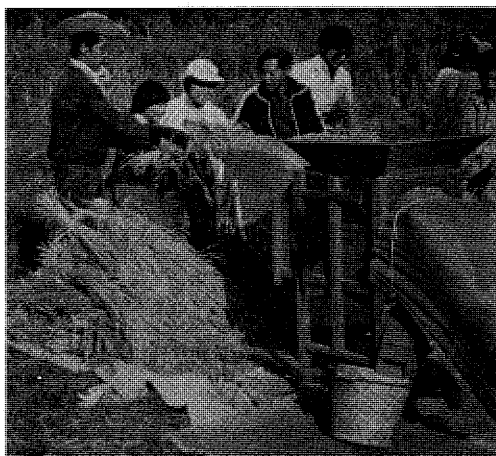
村橋 昔から農業地域だったところですから、そこから少し学んでやっさいこうという行事が出てきます。言ってみれば、火や水や土をとり込んだ季節の行事ということになるでしょうか。

四季の中ではどうなりますか、一月のどんど焼きから始まりまして、冬の二、三月ごろはできれば炭焼きをやる。これは今のところは大学生が中心ですけれども、多分子供たちも入ってくる行事になってくる。ついでにいますと、子供は火というもの的大好きです。それだけでも来ようがない。どんど焼きで火を燃やすだけで楽しくてしようがない。

この二、三月には、将来の森づくりのために苗木の植樹をします。子どもが二〇歳になったら、雑木林になつてくるから、伐採して炭でパーベキューをやるうね……というわけです。

六月末には、柴田敏隆先生の援助を得てカエル註の会

というのをやってみました。子供は舞岡に来て、田植えに来てみるとカエルがゲゴゲコ鳴いていますから、物すごく興味を持つ。カエルのことについて自分たちの知っていることに先生にいいながら、その習性を知ったり、ヘビはどうすると危険な点とか、子供の成長段階に応じて学んでいく契機にする。八月の終わりには夏虫を聞く会。秋には草花を見る会、お月見の会というふうに季節に合った行事をやる。十月には稲刈りをして十二月の初めには餅つきをする。冬に雪が降れば、真っ白い景



脱穀の風景

色の中に押しかける。そういう年中行事は他にいくつでもできるといふ気がします。

ことしの夏は、上智大学の学生を中心とした「アジア井戸端会」の援助を得て、上総掘りの井戸を掘っています。竹を使った江戸時代から明治期の農民の技術で掘っていくというので、子供たちが見にやってくる。

加藤 何か復活してくれると。

この辺のことで、森さんのさっきいったのと重なってくるのじゃないですか。

生き物の魅力

森 自然と一般的にいわれるけれども、自然の魅力、一番ほかの施設と違うのは、生き物がいるということですね。生き物との触れ合いはなによりも感動を呼び起こす。その生き物を手でつかまえられる遊びというのが一番の魅力だろう。

そこで考えなければいけないだろうと思うのですが、感動とか魅力とか発見とか、確かにそれは今、少な

くなってきているのです。昔のように自分で初めて見つけて、初めて発見したというのではなくて、顕微鏡一つのぞいてみても、これは教科書に出るとか、図鑑に出るとか、

情報がいっぱいあるから、あるいは疑似体験をしているから、感動はない。

では、だめかというところではなくて、僕たちの世代の昔のままやれというのは無理だと思ふのですが、そういう疑似体験を持っている子供たちが自然に接触したときに、生き物と触れ合ったときに、どうやって感動を呼び起こし、あるいは新しくまた自然の中に入っていくかという、その辺のノウハウの開発がこれから必要じゃないか。柴田先生なんかそういうノウハウを持って指導されているのですが、そういう人材が少ない問題があるのです。そうやれば、都市の中の自然も生き生きしてくるだろうし、子供たちも生き生きしてくるだろうし、単に自然を開放してもバサッとだめになるということもないのじゃないかという気が

がするのです。

遊び場で生き物を飼う

大村 生き物とのつき合いでいうと、デンマーク辺りの冒険遊び場の

主流の活動は生き物を飼うことです。それは全くの自然じゃない。アドベンチャープレイングラウンドというのは大体子供が二、三〇〇人ぐらい集まるところだったら、コペンハーゲンあたりでは、その倍ぐらい動物がいる。馬を飼ったり羊を飼ったり、大体馬だと五人ぐらいのグループで飼うとか、ウサギだと一人一匹です。三歳ぐらいの子供が自分のウサギを飼う。一人一匹それを世話を

していくというような形です。ですからどうしても数が多くなってきて、場所によっていろいろ違いますが、えさ代が大変で、ふんの始末が大変で、そのふんの始末に農家の糞を持ってきて敷いたり、砂を持ってきて敷いたりして、そのふんを返す仕掛けなんかは大人側が考えている。子供はそこで動物を飼う。大きな子供になつてくると、ふ化器を

置いてニワトリをかえすことだとか、種つけだとか、みんなやってしまえますから、牛は生まれまですし、羊は育てた羊の毛を刈って、それをつむいでホームスパンをこしらえたり、それが遊びなんです。

ですから自然というようなことで物を考えるときに、必ずしも自然を守るというだけではなくて、もう少し別なアプローチ、動物たちと接するとか、それから大自然じゃなく道端だとか生け垣だとか、そういうのがとっても大切だろう。

まちは虫嫌いだ

僕は世田谷の児童館つくりの時、昆虫の育つ生け垣をつくろうとして近所から反対をくらった。結局、近所の人は虫を好かないのです。児童館の中の生け垣は、人畜無害な虫がつかないような木にしないと怒られるわけです。

森 それは変わりませんか。日本だとだめですか。

大村 公共サイド側からだけだったら大丈夫だと思います。理解ある人

は。それをまちの中でやっていく
とするとご近所の人の合意を得
ていくのがなかなか難しい。

中間自然を体験の場に

村橋 このごろ中間自然ということ
ばがよく使われています。アルプス
のような大自然と、街の中の非常に
身近だけれども人工的な自然との中
間にある自然とってよいでしょう
か。

舞岡の公園予定地も中間自然の特
色をもった緑地にしたい。大自然と
中間自然と家の周りというふうに考
えますと、中間自然が両方の媒介に
なっているはずで。中間自然が丹
沢やアルプスに登る予備体験の場
なる。他方で、舞岡で常日ごろ遊ん
だ子供たちが、自分のすぐ近くを遊
び場として見直すきっかけにもな
る。そのためには、仕掛けが必要で
すが……。こういう中間自然が横浜
市に沢山ほしい。

森 上大岡の子供たちは先日もあり
ましたが、魚も住めないようなど
川ですけれども、川の中で泳いだ

り、大きな水車も回っているし、川
の中で遊んでいる。それは若手の会
とか、そういう人たちが頑張ってい
るからやれるだろうと思うのです。

子供のことについては、僕は余り
悲観的じゃないといえますか、何か
きっかけなり仕掛けなりあれば大丈
夫だろうと思います。

たとえば、弘明寺公園で、カブト
ムシのイベントを商店街と一諸にな
ってやっていますが、里親制度で、
子供たちにカブトムシのつがいを渡
して、それをひと夏、夏休みの間育
ててもらって、卵を産んで、卵なり
幼虫を林に返して、カブトムシとか
クワガタがとれる雑木林に変えてい
こうと。それは公園の魅力づくり、
活性化を兼ねてやっている。

あと今、自然との触れ合い、その
きっかけとしての虫との触れ合い、
とってもいいものとしてトンボが注
目されている。これは横浜だけじゃ
なくて全国的にそうになっていく。大
村先生もトンボ公園もつくられてい
ますけれども。今までの池というの
は単に水面があるだけで、魚がいる

だけみたいになっていっているのです
が、それをちよつと工夫し、水草が生
えるようにしたり、周りに木を植え
ばトンボが出てくる。トンボとい
うのは、とってももなかなかと
り切れるものではない。絶滅はな
かなかしない生き物です。静岡県の磐
田市に日本一トンボの種類の多い桶
ヶ谷沼というところもあるのです
が、そういうところでも自然保護活
動の団体が頑張っているけれども、
子供はとってもいいことになってい
るのです。

トンボをとるのはなかなか技術が
いるし、子供なりに全身を使って五
感を働かせてやらないとなかなかと
れるものではないし、そういう遊び
場をつくっていい。本牧市民公園
でも、これから池を改造してやっ
ていこうと。

八——世田谷の実例

加藤 横浜市の参考にといい意味で
大村さんに世田谷の実例を伺いた
いと思つてます。一つは、かなり

たくさん児童館ができていて、子供
たちの集まる場所になってい
る。それから職員の方がたくさんい
る。活動の実際がどうか、できた
ことでどうなったのか、あるいはそ
の効果とか問題点とかを、ちよつと
教えていただきたいのですけれど
も。

プレーパークの意味

大村 世田谷の場合、児童館が目標
としては小学校区二つに一つでまだ
目標には達していないけれどもかな
りいいテンポでつくっている。そ
れは子供たちのためになっていると
いうのはいうまでもないことす
が、私たちがプレーパークをやる
いうときには、子供のためには公園
があるとか児童館があるとか、そ
ういうものがあればそれで終わった
ということではないということ、ま
ちの中の子供たちがいかにもお
もしろいことがわからないでいるよ
うな、何かやろうとすることができ
ないでいるような、そういう状況に
対して、何か市民側でお手伝いをし

た方がいいのではないかということから始まったことです。

行政もかなり応援してくれますし、児童館の職員も意識のある人はいろいろ協力してくれます。児童館の職員にいわせると、館の中では、例えば管理責任の問題なんかでいろいろなことをやらせられない。ところがプレーパークだと自分の責任で自由にやるのだということが一つの憲法になっていますから、そこにお手伝いに来ると非常に気が楽なわけです。日常的にはもっとこんなことをやらせたいと思っても、例えば職員としては無理なことなんかあるわけです。そういうようなことから解放されるという要素があつて、そういう状況を住民サイドでつくるというのが一つのねらいだろうと思ふのです。

特に子供の遊びというのは、児童館というようなところに全部押し込めてしまつていいかどうかということがあつて、本当なら公園だとか児童館がうまく有機的に結ばれていて自然の中にも置かれていれば、館

の中にいるだけじゃなくて、館の中にもいたり、外に行ったり、いろいろな多様な活動ができるけれども、世田ヶ谷ではとつてもそんなのは無理だから、結局児童館が建てられる敷地をやつと確保して、そのところに建物を建てます。その建物の中に工作をする場所とか、いろいろなことができる可能性をつくるわけですが、そういうことに向いている人にはいいけれども、遊びが持っている展開というか、不思議に転がっていくような、そういう要素を持つていないのです。

プレーパークは、そういうことに對して、もう少し違った目を行政に向けてほしいというか、児童館をつくるときには、自然だとか公園だとかとの関係をもつと考へてほしいとか、プレーリーダーが余り管理責任を負わされる問題のために窮屈な形で活動しないで、もつと伸び伸びと何かやつてほしいとか、そういうのを外側からアピールするということも効果も持っているだろうと思ひます。

しかし、一方で、親がある時期、子供の遊びみたいなことを考えたことが伝わっていかない。状況はどんな悪くなつていくところで、底辺がふえていかない。問題は、私はどちらかというとかかなり深刻じゃないかと思つているわけです。どんな状況は悪くなつていく。

行政は地域の活動に目をこらせ

その中で行政の目を開いていく地域活動みたいなものが、あちこちで實際起きていく。行政が、自分たちが自主的にプロジェクトをつくるだけではなくて、いろいろなことで起きている活動にもつと目をこらして、取り上げてほしい。その中には今までの行政のやり方とは非常に違つていて、おかしく見えるかもしれないけれども、子供の将来の生活をどう組み立てるかということについてのヒントはいろいろあるところにあつて、みんなささいなところでもいいとかだめだとかいうのですが、大体いろいろなことをやつている活動は、みんなおもしろい側面をそれぞ

れ持つているわけです。

そういういいものをお互いに評価し合つて、行政が取り組めるものもしっかり行政が取り組む。特に基盤をつくつていくのは民間では無理ですから、民間はソフトな活動というのはいろいろやつているけれども、土地を得たりするのは無理ですから、そういう仕掛けは本気になつて考へてほしいと思ふし、ヨーロッパなんかには比べるとずつとおくれています。

しかし、一方ヨーロッパの人が羽根木に来ると、なぜこれだけコミュニティの人々を巻き込んでいるかと、彼らがつくり出すのです。彼らの方は場は一生懸命つくつたけれどもコミュニティを巻き込む仕掛けが、つまり行政がうまくやり過ぎているものだから、いま一つうまくいっていないところがあつて、ノウハウを知りたいというわけです。

加藤 さっきの大自然と中間自然、そして身近な自然という、これを精神の構造でいうと、やらされている

ところから、自分がやって楽しむという場所をあちこちにつくって行く。本当のところはもつと、まちじゅうが全部みないなところがあるけれども、とりあえずそれができる場所として児童館というのが存在するのじゃないか。

児童館は子供の興味や関心を軸として

児童館というのは子供の見方の問題がすごくあるだろうと思うのです。学校教育が生まれたというのは、子供を大人とは違った存在として発見したということがあると思うけれども、もともと子供というのは大人の中にそのまま入っていて、F・アリエスなんか、区別なく小さな人間が一人いるという感じで一緒にやっていたと見たわけでしょう。それを子供を対象にして、しかもその子供に未成熟だからきちんと教えていかなければ一人前にならないということがあるものだから、そういうことで子供を発見していったわけです。そういう対象として子供を発見

したものですから、子供に教える、育てるとというのが先行して、教育とというのは成立した。ずつとそれが進んで来て、今、行き詰まりのところまで来た。

子供の方はそれと違った感覚でいるのに、大人の方は教え続けなければいけない。しかもこれだけ情報が発達してくると、大人と子供とどっちが情報があるかというところ、子供の方があつたりして、そういう状況の中で、大人と子供というかつちり區別をつけて教えなければならぬというのがあるのは学校だけです。だから学校の中が窒息状態になっている。

だから、子供と一緒にというか、自分の関心に向かつて、教師というか、大人も自分のやりたいことに向かつてどんどん始める。そしてやらされるのではなくてやっていくという姿を見て、子供同士が選ぶのかな、あのリーダーというふうにな。天文学が好きな人のところに訪ねていくとか。

児童館の職員といったら、僕なん

かのイメージは、非常に好奇心が強くてコーディネーターで、その人が全部やり切ることもできないから、あそこにこんなおもしろい人がいるよとか、そういうことをつなげていってあげる人だったらいい。一つ一つのことについては素人でかまわない。それで一緒になって楽しむという人の方がかえっていいでしょう。学校教育とは完全に切れた形のものとして、児童館とか公園なんていうのは存在しないといけないと思います。

今、子供の興味、関心を軸にして組織するか、教師や大人の側がこういうことをやらなければいけないということを中心にして組織するかというところで完全に違う。今は子供の側の興味や関心で何かをするというところが、制度的にも何でもずたずたとにめられているから、これを相対に、半分ぐらいまで引き延ばさないと、自然とのつながりだとか、児童館だとか、遊びというのは、みんなそこを膨らませようという仕事だから、これがバランスとらないとだめ

だということですよ。

学校ももつとおもしろくならないか

大村 学校ももつとおもしろくなるんじゃないかという気もするんだけど、僕なんかは行くのが楽しくて、起きるとわくわくして、とにかく授業時間前に一生懸命行くわけです。始まる前にひと遊び。今から考えるといい学校だったんじゃないかなと思います。

加藤 今度の実践記録の中の、鶴見川子ども発見団や幸ヶ谷小学校の総合活動、これはやっぱりおもしろいですね。

村橋 まさに今いったことですね。学校から地域に先生方が出て子供と一緒にという……。

加藤 おばあさんの話聞いたり、おじいさんの話聞いたりしながら。

大村 僕らのときは、小学校で、昔だからはっきり記憶がないけれども、多分五年と六年生に、PTAのおやじが講義するというのが、年に何回か、二カ月に一回かわからない

けれどもあった。僕が建築家になろうと思つた理由にはそういうのがあ
るわけです。

クラスの中に、剣持勇というデザ
イナーがいたわけです。それから野
崎さんという、京王プラザホテルな
んかつくつた建築家がいて、考えた
ら今の僕より若い、四〇前の人が、
自分の息子や娘のためにレクチャー
した。野崎さんは「住まい」という
話をした。黒板にかく絵がすごいチ
ャーミングで、学校の先生とは全然
違うわけだ、腕のいい建築家がさあ
つとかくいろいろな絵。堅穴住居と
いうのをなぜつくつたか、どうい
うのが便利だとか、何が不都合だ
とかいう話をしたのだけれども、す
ぐ興味があつた。あんことは、今だ
つてやろうと思えばできるのじゃな
いかと思ふけれども。

から解放された学生は、何をどうい
う視点で勉強したらよいかわからな
い。都市の環境問題といつても、生
態系や景観や文化や経済、あるいは
まちづくりの問題と深く関係してい
る。学生の感想文をみると、講師へ
の共鳴や反発を通じて、彼らが生き
生きと考へ始めていることがわか
る。

複雑で立体的な現場の話は、今ま
でひとつの窓口から解こうとしてい
た学生の心の中に入つていって、ト
ータルな広い視野へと向わせる役割
をになつていっていると思います。

皆のためのプログラム

加藤 今の子供たちと大学生とい
うのは大体同世代に入つてい
るから、さつきいろいろ出てきた、体験がな
いとか、人間関係が下手だとか、遊
んでないとか、その辺のところは共
通になつてい
るから、やっぱり同じ
ことをつくつていくことになるし、
その人たちがもし変わってくれば、
その人たちと子供たちが出会つてい
くと、一緒に取り戻していくとい

う、同士というか、同じ仲間になる
という感じもありますね。

大学生がもつと地域にいて子供た
ちと遊んでくれるといいなあと思つ
ているけれども、少ないですね。

村橋 今のところはね。

大村 彼らの興味が持てるようにす
るといふことが大切ですね。子供の
遊び場というのをベースにして、農
大の学生さんなんて、ふだんは私
家の前をうろろ通つて悪ざしたり
大声だしたりして歩いていますが、
そういう人たちが地域社会のことに
かかわってくれるといふことだつた
わけです。彼らに責任を持つてもら
つてやってもらつと、意外に行動力
がある。

最初、遊び場やつたときに、前の
酒屋のおやじが感激して、今バイト
に来てい
る学生たちといふのは、何
いいつけても仕事できないと思つて
いたけれども、ここに来てい
る学生
たちは一人です。大人がい
ないに
みんないろいろなことをや
つてい
るといふわけです。それで暑い炎天
下でいろいろなことをやつてくれ

いるといふのでビールを一カートン
ぐらい持つてきてくれる。そうす
るとそれがまた学生の刺激になるわけ
です。そのおやじといふいろいろやり
りして、それは社会の人にそういう
形で認められたといふのは非常にう
れしい。

お母さんたちはお母さんたちで、
学生が一生懸命やつてくれるとい
ふので、ひやむぎこさえたとか何と
かいつていそいそやつてくるから、学
生にしてみれば、こんな大切にも
なされたことが今までないわけだ
から、やる気十分になつて、あれや
つてやろうか、これやつてやろうか
といふ話に展開していく。

それは子供のプログラムだつたけ
れども、違う視点でもし考えれば、
学生のためのプログラムであつた
ら、また違った目で物を見てい
れば、地域社会のためのプログラムで
あつたといふようなことだ
らうと思ふのです。大体のこととい
ふのは、そういうものじゃないかと思
ふのです。

加藤 児童相談所でキャン



連れていくでしょう。大学生のボランティアをいっぱい使うのです。物すごくお互いに軌激になります。子供たちが一つのモデルを、大学生たちに見つけるのです。

大村 つき合う場をセットするといふか、それは大切な仕事だと思いません。

九——リーダーの質

編集部 いくつかの活動を取材中し感じたのですが、お母さんと子供

だけでなくて、男の人も乗り出してきて、本格的な活動になっている。

大村 こんなことをいうと怒られてしまうけれども、子どものために、と思っている人に。子供が本当に生き生きしてくれる状況をつくり得ていない。上大岡なんかおもしろくなっていくのは、そういうのじゃなくて、子供が生き生きすることを知っている人たちがケアしているということだろうと思うのです。だから舞岡なんかに行けば、先ほどのお話のように、そうじゃない人たちが連れて行ったときにはおもしろくならなくても、非常におもしろくダイナミックにかかわっていくのだろうと思います。

森 大人というか、リーダーが乗っていないとだめですね。

大村 できれば、行政の中のコーディネーター的な役割を果たせる人、地域の中でそういう人を非常に重要視したらいいと思うのです。世田ヶ谷の児童館を見ている、そういう役割を果たせそうな人ではなくて、学校の先生の資格を持っていると

か、保母さんとしての能力があるとか、そういう人が職員になってくるわけです。もっと地域の人をうまく動かしていったり、地域の人のニーズというのをうまく反映して盛り上げていったりできるような……どういふところを卒業したらそういう人になるのかわかりませんが、そういう人がいてくれたら、児童館はもっともとおもしろくなると思うのです。

加藤 人でしょね。

大村 人です。採用のときの基準が違うのじゃないか。

森 自然観察とか自然と子供の触れ合い等でも同じです。自然についての専門家がいないと観察指導できないという、必ずしもそうではない。専門家は名前や自然の仕組みを教え込もう、教え込もうとして失敗することがある。専門知識は浅くても子供と一緒に楽しんだり、調べたり、遊んだりする。そういう人の方が後から子供が乗ってくるというケースもある。

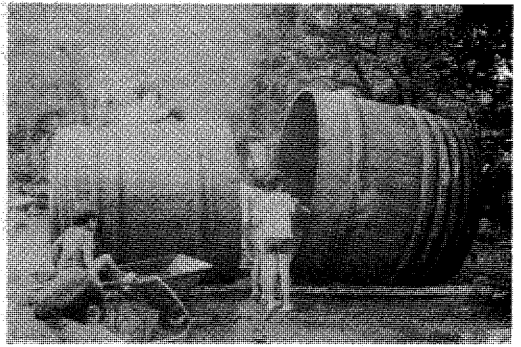
大村 おっしゃる話はレディー・ア

レンの『都市の遊び場』という我々が訳した本の中に書いてあるんだけど、リーダーというのはとても重要だと。リーダーをどういふふうに育てるかというのが大きな問題だと。大体普通の学校の先生の教育だとか、保母さんの教育を受けた人がリーダーになってなかなかうまくいかない。

今までどういふ人がうまいかという話では、配管工をしていたおじさんだとか、船乗り上がりだとか、予想外の人、今までのヨーロッパあたりの名プレーリーダーだといわれた人というのはそういう人だという話なんです。

プレーリーダーとは

プレーリーダーという言い方をすると、まちの人は、きょう竹トンボ教えましょうみたいな人だと思ってしまうけれども、それは余り必要ない。むしろ子供たちがこさえた家が台風になったときに、近所の家を直撃しないように工夫をしたり、そういうようなことをプレーリーダーは



やっているわけです。これはどうしてもだめなら子供の家を壊してしまおうとか、子供たちを呼び集めてもっとしっかり押さえて飛ばないようにしようとか、そういうことをやる人がいないと、どこかの家の窓ガラス壊した、こんなことやっているからいけないんだ、もうやめにしなさいと、すぐそういう話になってしまふ。そういう状況の中で、適度に地域の様子を見ながら働く人というような意味合いですね。

村橋 いわゆる専門家でないリーダー

ーは、それが地域の古老でもよいと思いますが、とりあえず正式の職員でなくても、何らかの形で活動できるシステムはつくれるのではないですか。

大村 羽根木の場合には、一人はボランティア協会の職員という形で、羽根木プレーパークの仕事を、区の委託事業としています。区からボランティア協会に委託をしてボランティア協会がそれを運営する形です。それでボランティア協会の専門委員という形で、天野君というリーダーを、行政の補助金で雇っている。各世田谷プレーパークと羽根木プレーパークとはそれぞれ地区の住民が何らかの形でつくったお金で、常駐者をそれぞれ雇っています。給料は非常に安いけれども、やってみたいという人が何人か毎年いて、その人の中から、その人が最低困らない程度の費用しか出せないけれども、住民がお金を出している。それから素材などの費用は、大体行政側で出してくれています。

ボランティアで毎日やってくる学

生さんに対する費用は給料にはならないけれども、食費と交通費分ぐらいは世田谷区が出ています。

ですからお金はかなりのところ、行政から来ていますが、行政は常駐者を置くお金を認めていないので、そのお金は自分たちで何とかしてでも出そう。つまりコミュニティのお金を使っている。そのほかにボランティアが三六五日のボランティアをやっていきます。それを受け入れていきます。そんなような人たちと、あとは時々やってくるボランティアで運営されているような状況です。

地域で実績をつむ

羽根木にうまく移行できたのも、その前に何年間か地域の人たちでいろいろなることをやっていて、事故なども起きたけれども、地域でそれなりにこなしたという実績があつて、それが行政が踏み出した理由だろうと思うのです。ですから最初から行政を突き上げないで、自分たちでやることをやり出すというのも一つ

の手だし、それから行政の理解が得やすい場所では、そんなにパーフェクトなものでなくても、そこそのものをまず何か動かし出して、動いているうちにだんだん理解が深まってくれば、少しずつ輪が広がっていくのではないかと思います。

一〇——子供、自然、まちづくり 運動のネットワークを

森 一番のこれからの課題は、今までは子供問題をやっている人は子供だけを追いかけていた。最近、子供問題を追っかけている人の中にも「まちづくりや自然問題への関心が広がってきた。他方、まちづくりサイドでも子供とか自然の問題に関心をもたれるようになってきた。また自然問題を追いかけている人も、多少、まちとか子供の問題に関心を持ちはじめてきている。今までは「自然」をやっている人、「まち」をやっている人、「子供」をやっている人がなかなかうまく重なってこなかった。だんだん少しずつ重ねられて、

「舞岡」の自然



自然が必要なんです。この場所が子供と大人の研修センターの役割を果たせば、自分たちのまちづくりそのものにも大きなプラスになると思いますよ。

大村 ちよっとPRしますと、一九九〇年に世界国際遊び場協会の世界大会を東京でやる。三年に一回の会議なんです。この間、日本でやる権利を獲得してきましたので、またいろいろなご協力をお願い申し上げます。

ネットワークされてくる、そういう芽が出てきているのではないか。これがうまくネットワークされれば、もう少し変わってくるのではないかと感じるはあります。

きょうみたいな場合は、一つのきっかけになるだろうと思うのです。

村橋 そのためには、舞岡のような中間自然を多く行政側が確保する必要があると思います。文化・福祉・自然・農・子供の成長など、いろいろの窓口から入る人を受け入れるためには、ポリユームのある質の高い

加藤 森さんがいったネットワーク、子供の問題、自然の問題、まちの問題とか、いろいろやっている方たちがつながっていると、これは僕らは前から思っていて、横浜はちょっと大き過ぎるけれども、これでもし合同のイベントなんていったら相当なものができるだろう。僕なんかがつかんでいるいろいろな人脈はすごく多いでしょう、子供が多いけれども、それがさまざまところにいるいろいろな取り組みしているのです。それだけでも集めたらすごいなあと思

ったり、それこそ「横浜子供新聞」だとかできて、どこで何がある、どこでどんなお祭りやっていると、僕が行かれないけどもみんなに伝えたいなと思うのがいっぱいある。もつと情報のネットワークが広がると、あそこに行ってみよう、ここに行ってみよう、自分の身近にこんなのがあったというふうなことで動き出す。情報がまだ分断されていると思うのです。それぞれの分野の中にはかなり丁寧に入っているけれども、しかし横断するように形で、身近な情報が伝わってないのです。だから子供たちも意外と知らない。そういうのを知っていると、自分でもやってみようという人が出てくる可能性はすごくあるのです、横浜というまちは。

△大村 慶一 都市計画設計研究所代表
表／加藤 彰彦 民生局南部児童相談所／村橋 克彦 横浜市立大学経済研究所助教授／森清和 公害対策局公害研究所

- 注(1)「高齢化社会に向けた子どもの環境調査・報告書」(昭和六十年七月、民生局)、「同報告書・Ⅱ」(昭和六十一年六月、企画財政局高齢化社会対策室)
注(2)「子供の養育と家族」(昭和六十一年三月、企画財政局都市科学研究室)
注(3)国際児童年を迎えるにあたって「遊びの重要性」を世界に訴えた声明文
注(4)世田谷区立羽根木公園の一面に開設された「羽根木プレーパーク」
注(5)特集3「私たちのコミュニケーション・パーク作り」参照
注(6)特集4「子どももフルに伸びるまちづくり」参照
注(7)特集5「みんなで創ろう子ども環境プラン2001」参照
注(8)「国際遊び場協会」のこと。国連の児童権利宣言に「子どもの遊ぶ権利」を盛りこんだ人たちが、それを実現するために創った国際組織。
注(9)特集3「ワークシヨップ方式の公園づくり」参照
注(10)日本自然保護協会理事。各地の自然環境調査、観察会などを指導しているナチュラリスト
注(11)特集2「鶴見川子ども発見団活動報告」参照
注(12)特集2「地域に広がる学習の場」参照